

架け橋期におけるアクティブラーニングを通した 「10の姿」育成の考察

— 「社会生活との関わり」を焦点として —

佐藤 佳子（桐蔭学園幼稚園・非会員） 田中 淳一郎（桐蔭学園幼稚園・非会員）
善野 八千子（奈良学園大学） 溝上 慎一（桐蔭学園・桐蔭横浜大学）

キーワード: 架け橋期、アクティブラーニング、10の姿

1. 研究の目的

教育は、子供一人一人の生涯にわたる発達や学びの連続性を見通して行われるものである。

善野（2022）¹⁾は、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」（以下、「10の姿」と表記）に着目し、ネットワーク上のスプレッドシートに、観点別記入を共同編集できる園日誌を考案した。

この取組を継続実践した教員へのインタビュー調査の結果、保育活動の意識変容として有効であること、幼児教育から学校教育への育ちの連続性を見通す情報共有となること等を明らかにした。

「幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）」²⁾において、「10の姿は、（中略）子供の実態に沿って主体的・対話的で深い学びの充実を図れるようにするために必要な手掛かりとして活かすことができるもの」と示されている。

本研究では、「幼小接続期の教育保育の質向上」に資するため、「10の姿」のうち「社会生活との関わり」に焦点を当てて、主体的・対話的で深い学びの充実に図り取り組んだ実証研究から考察する。

2. 研究の概要

（1）「10の姿」のスプレッドシート活用の取組から見えた課題と新たな取組

取組期間の初期（2021年9月～10月）では、「社会生活との関わり」の欄には空白が多くみられた。

そこで、以下の視点で「今日のニュース」の取組を展開した（5歳児の実践のみを抜粋）。

- ・「今日のニュース」の取組は、「社会生活との関わり」に主体的に興味関心をもつことが可能か。
- ・「今日のニュース」の取組は、「社会生活との関わり」に関する対話的で深い学びとなるか。

設定の根拠として、小学校入学後も取組が継続可能な活動であること、生活科の「自分との関わり」「社会との関わり」「自然との関わり」において、各単元導入の連続性が重視されていることである。

（2）方法

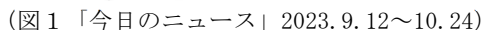
「社会生活との関わり」を焦点とした「今日のニュース」の取組は、以下の5段階の方法である。

- 1) 「話したいこと」がある幼児は、前に出て話す。（輪番制にしない）
- 2) 「話してよかった体験」となるよう、最後まで聞くことを指導する。
- 3) 話し手は、メモなどを見たり、動作化したり、自分なりの表現で伝える。
- 4) 保育者は聞き手に徹しながら、補足したり、話題を学級全体に拡散したりしながら、ホワイトボ

5) 保育者は、メモしたホワイトボードを教室環境として掲示した後、記録しておく。

3. 分析結果と考察

さらには、家庭教育での実践的行動変容にも結びついていることも現時点で追跡中である。



(図 2 「今日のニュース」 2023. 10. 25～11. 30)

以上の分析結果と考察から「今日のニュース」の取り組みは、「社会生活との関わり」を主体的・対話的で深い学びの充実を図ることができると結論づけることができた。これは、架け橋期における「社会に開かれたプログラム」の一つになり得るのではないだろうか。

1) 善野八千子 (2022) 「幼小接続期における子供の育ちと学びに関する考察～「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」をてがかりに～」『奈良学園大学紀要第15集』79-96

https://www.mext.go.jp/content/20220405-mxt_youji-000021702_3.pdf (2023. 10. 11 最終閲覧)

3) 溝上慎一（2023）「学習パラダイムに基づいてアクティブ・ラーニングから学習・ライフの個性化へ」 梶田敦一（責任編集）日本人間教育学会（編）令和の教育課題－学制 150 年を踏まえて－（教育フォーラム 71） 金子書房 49-59

4) 溝上慎一（責任編集）河合塾（編）（2023）高校・大学・社会 学びと成長のリアルー「学校と社会をつなぐ調査」10年の軌跡ー 学事出版